

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷九十二第

行發日一月八年四和昭

論叢

清涼飲料稅論 法學博士 神戶 正雄

限界經濟學と制度經濟學 文學博士 米田庄太郎

勞銀の理論 文學博士 高田 保馬

說苑

經濟學史基礎論 法學士 石川 興二

幕末の商社 經濟學士 菅野和太郎

セイの販路說に就て 經濟學士 谷口 吉彦

シニピイトホフの景氣循環論 經濟學士 靜 田 均

雜錄

伊太利の財政經濟近況 經濟學士 有井 治

經濟理論と經濟史 經濟學士 堀江 保藏

近着外國經濟雜誌主要論題

セイの販路説に就て (下)

——(彼れの恐慌論の吟味)——

谷口吉彦

目次

一 販路説の意義	二 販路説の内容	三 販路説と恐慌論	前號掲載
四 販路説の發展	五 販路説の修正	六 販路説の批判	本號掲載

四 販路説の發展

吾々はすでにセイの販路説が彼れの獨創に出づるものであるか否かにつき、學者の間に異論のあることを指摘した。彼れの獨創性を決定するためには、先づセイ以前に於て、之に關聯した主張が如何に發展したかを見なければならぬ。

商品は結局に於て商品と交換されるとなす物々交換説は、フイジオクラード及びスミスにとつて『ありふれた考へ』であつたとしても、なほ吾々に殘された問題は、第一に販路説はたゞ物々交換説にのみ立つものであらうかどうか？ 第二にセイはたゞ彼等の考へを繰返したに過ぎないかどうか？ の點にある。第一の點につき、すでに吾々は販路説が單に物々交換説のみならず、スミスの價格構成論および之と結合せる彼れの收入分配論に立脚するものなることを指摘した。そ

れ故に少くとも、販路説をもつてフイジオクラートの再生産にすぎないとなすは不當であらう。然らば第二にそれはスミスの再生産に過ぎないかどうか？ この點についても吾々は賛成しがた。なるほどそれはスミスの交換論および分配論に立脚するとしても、彼れは決して是等をたゞ其のものとして論ずるのではない。それは一の『販路説』となつて新たな發展を示してゐる。この發展は主として時代の流れに負ふものであらう。まことにリスト教授の認むることく、セイの理論には産業革命の影響を認むべきものが少くない。スミスの『國富論』（一七七六年）とセイの『綱要』（一八〇三年）との間には、僅かに二十七年の間隙をおくにすぎないが、此の間に於ける經濟的發展のテンポは、未だ嘗て見たることなき迅速さであつた。スミスの時代に多く問題となり得なかつた生産過剰と之に伴ふ近世的恐慌は、セイの時代に至つて、殊に『綱要』の準備されつゝあつた時代と、その各版の進行しつゝあつた時代に於て、經濟學上の中心問題とまでなつたのである。スミスの理論が販路説に發展したことは、この意味に於て寧ろ當然であつたと見ることが出来る。然らば同じ事情の下に、時代の影響を受けたるべきセイと同じ時代の他の諸學者、就中ジェムス、ミルとの關係はどうか？

ジェムス、ミルの子ジョン・スチュアート、ミルは、此の點に關して次の如く述べてゐる。

『この最も重要な點を、その眞正の姿に現はした功績は、主として大陸に於てはかの明敏なセイに、此の國に於てはジェムス、ミル氏に歸せらるゝ。後者は……當時の論争によつて齎された「商業辯護論」と題する初期の小冊子に於て、この説を力強く且つ明瞭に述べてゐる』¹⁾と。

- 1) C. Gide et C. Rist; Histoire des Doctrines économique (1926). p. 129-133.
- 2) J. S. Mill; Principles of Political Economy (1843). (Ashley's ed., 1917. p. 562-563.)

これによれば彼れは、父の『商業辯護論』を指摘することによつて、販路説の功蹟を父ミルとセイとの間に均霑せしむるもの、様である。然らば商業辯護論に於けるミルの所説はどうか？吾々は別の機會に於てミルの所説を詳論するであらうから、こゝではたゞ問題の要求する範圍に於て、彼れの所論を吟味することとする。

ミルの小冊子は、ウキリアム、スペンスの『イギリス商業獨立論』(Britain Independent of Commerce, 1807)の所論——フイジオクラートを承けて國富の根源を農業に求める——を反駁せんために生れたものであるが、その全體の論旨よりも寧ろ消費に關するミルの主張、即ちこゝに問題とする主張の故に、今日その存在を認めらるゝものである。彼れはまづ、生産物に對して販路を提供するものは、不生産的消費であるといふフイジオクラートおよびスペンスを斥けて、第一に物々交換説に立脚して、商品の一半は他半と交換さるゝ故に、全體としては過剩も不足も起らないと主張する。

『貨幣を問題外におく時は、年々相互に交換さるゝものは、眞實にはその國の種々の商品、即ち年産物の種々の貨物ではないか？……實際にその國の年々の賣買を構成するものは、一國の財の一半であつて、その反對も亦さうでないか？……すべての財は其の一半が他半と交換さるべく、市場は常に供給と等しいであらう。かくて一國の需要は常に一國の生産に等しい様に見える。』

彼れは更に轉じて他の見地——價格構成および收入分配——から同じことを論證する。

『一國の需要は精確にその購買力である。然らばその購買力とは何か？ 疑もなくその範圍は年々の生産物である。……』

- 3) J. H. Hollander 氏が之を Thomas Spence としたのは、恐らく何かの誤解ではないか？ Note on Malthus (1928), Editor's Introduction p. lxxxi.
- 4) J. Mill; Commerce defended (1808). p. 82-83.

一國の年生産のあらゆる分子は、収入となつて何人かに落ちる。然るに國民のあらゆる個人は一律に、彼れに與へらるゝすべての額をもつて、購買をなすか又は購買すると等しいことをする。單なる消費に向けらるゝすべての部分が購買に用ひらるゝことは明らかであるが、資本として用ひらるゝ部分もまた、これと異なる所はない。それは直ちに食物その他の必需品を買ふ所の勞働者への勞賃として支拂はるゝか、原料の購買に用ひらるゝかである。それ故にその國の年産物の全體が購買をなすに用ひられる。然るに賣りに出されるものも亦、年生産物の全體であるから、そこで明らかことは、年産物の一部が他の部分を購買するに用ひらるゝこと、およびその年産物が如何に大きからうとも、それは常にそれ自身に向つて市場を作り出すといふこと、……ならばに資本として用ひらるゝ部分が如何に大きからうとも、その結果は常にその國をより富裕ならしめ、その人口をより稠密ならしめるものであつて、決して國民市場を混亂せしめ又は過剰ならしめるものではないといふことである。¹¹⁾

かくの如くして年産物全體としては、決して過不足を生ずるものではない。一般的生産過剰はかくて否定される。併し乍ら同時に彼れは、部分的生産過剰をも否定するものではない。生産部門に於ける均衡の破壊は、部分的な特定商品の過剰および不足を來すことはあるけれども、此の過剰と不足は、資本の自由な移動による均衡の恢復によつて、常に平均さるゝ傾向にあるものとして考へる。

『一國は、一般商品を必要以上に有ち得ないとしても、或る一商品を容易に必要以上に有ち得ることを注意するのは必要であらう。

『或る一商品の分は、容易にその適當な割合以上に超えることがある。併しこの事情そのものは又、或る他の商品が十分な割合で生産されないことを意味する。……この過剰な商品の生産に用ひられた生産手段の一部は、他の商品の生産に用ひら

れて、彼等の間に均衡が成立せねばならぬ。この均衡が適當に維持される時は、常にそこには商品の過剰はあり得ないし、市場の開かれてゐないものはない。また事物の自然の秩序は、この均衡を保つ力強い傾向を有するから、政府の無謀な干渉が之を妨げない所では……それは常に極めて精確に維持されるであらう。』⁶⁾

以上『商業辯護論』に關する限り、ミルの所説は第一に物々交換説に立ち、第二に價格構成論および收入分配論に立つて、第三に一般的過剰を否定し、部分的過剰を肯定するものである。次にそれは子のミルの批評する様に、「力強く且つ明瞭に」主張されてゐる。そしてこの書の第一版は一八〇七年に出たものであり、セイの販路説が問題となつたのは『綱要』第二版の一八一四年以後であるから、ミルはセイに先だつこと七年前に、すでに之を創唱した様にも見える。事實に於てミルの小冊子の出版後約十年の間は、ミル、リカアドウ、マルサス等の經濟學者の間にあつて、それは『ミル氏の考へ』(Mr. Mill's idea)⁸⁾または『ミル氏の理論』(Mr. Mill's theory;⁹⁾ the theory of Mr. Mill)¹⁰⁾の名に於て、彼等の間に論議されつゝあつたものである註。然らば吾々はホランダー氏と共に、『年代上の前後に關しては、此の疑問は明らかにミルに有利に解決される』¹¹⁾と断定して、ミルをもつて此の説の創唱者とする事が出来るかどうか？

註 一八一四年九月十六日附のマルサスにあてたりカアドウの手紙に言ふ、『もしも君が、資本の増加すると共に、人々は消

費および蓄積に對して無關心となつてくるであらうと考へるならば、それはミル氏の考へ——國民に關する限り、供給は決して需要を超過し得ない——に反對する點に於て正しい。だが資本の増加は、すべての種類の奢侈に對する嗜好の増加を惹き起さなからうか？』¹²⁾と。

6) *ibid.*, p. 84-85.

7) A. Bain; James Mill (1882), p. 62.

8) Letters of Ricardo to Malthus 1810-1823, Bonar's ed., (1887), p. 44.

9) *ibid.*, p. 49.

10) *ibid.*, p. 50.

吾々はホルンダー氏の此の説に賛成しがたい。何となれば、セイの第一版はすでにミルに先だつ四年前の一八〇三年に出版されてゐるからである。たゞ問題は、このセイの第一版が、當時すでにミルによつて知られてゐたかどうか、またセイの第一版の所論とミルの所論との關聯はどうかにある。第一の點につき、吾々は之を積極的に主張し得る典據を有する。それはミルの商業辯護論にはすでにセイの第一版の引用を發見し得るからである註。従つてミルはすでに早くセイの影響を受けてゐたと考へねばならぬ。然らば第二に兩者の所論は如何に關聯するか、ミルは單にセイの再生産に過ぎないものかどうか？　こゝで吾々はセイの第一版を顧みねばならぬ註。

註　ミルはその商業辯護論にセイを引用して言ふ、『最近のフランスの著者セイ氏は、その經濟學綱要第五編第三章に於て、此の説（消費に關するフイジオクラートの説）の實踐的偉業者に就て興味ある一挿話を語つてゐる。彼れはいふ、「一人の若者が、ガラスの壺瓶を空になるに従つて窓から外に投げ捨て、それで（ビン）製造業を奨励する筈だといつてゐたのを私は知つてゐる」と。』¹³⁾——これが即ち前に引用したる『Tells氏の近業に『販路説の芽萌』として引用されてゐるエピソードである。

一八〇三年のセイの初版は、第二版以後の諸版に比して、全體に於て甚だしく未完成のものであつた。例へば一般にセイの功蹟として認めらるゝ生産・分配・消費の三分法の如きも、初版に於ては未だその形態をどのへてゐない。問題の販路説はすでに此の初版から獨立の一章（第一篇第二十二章）として取扱はれてゐるが、その分量は第二版の約五分の一、三頁半にすぎず、その内容もまた従つて甚だ粗朴たるを免れない。けれども販路説の根本命題は、すでに明らかに展開され

- 11) D. Ricardo; Note on Malthus, ed., by Hollandet and Gregory, (1928) p. lxxxii.
12) Letters of Ricardo to Malthus, p. 43-44.
13) J. Mill; Commerce defended (1808), p. 76.

てゐる。

『販路を容易ならしむるものは、決して貨幣の豊富なことではなく、むしろ一般に他の生産物の豊富なことである。……このことは經濟學に於ける最も重要な真理の一つである……』

『その國民が多くの物を支拂ひ得れば得るほど、ますます多くの販路を彼等に提供する。そして國民がその生産を増加すればするほど、それに批例してますます多くのものを支拂ふことができる。貨幣はたゞ此の二重の交換の裡にあつて、通りがりの役目を果すに過ぎない。交換が終ると彼れは、人々が生産物をもつて生産物に支拂つたことを發見するであらう。』¹⁴⁾

これによつて生産物に對して販路を提供するものは生産物であるといふ根本命題はすでに明瞭である。たゞこの命題の論證は、右の引用によつても見らるゝ如く、専ら物々交換説に立脚するに過ぎない。また此の命題から當然に演繹さるゝ所の一般的過剰の否定および部分的過剰の肯定も、販路説に關する限り全く論及されてゐない。然るに吾々の既に見たるが如く、ミルに於てはそれは販路説として存在しないとは言へ、第一の論證は物々交換説に立つと共に收入分配論に立脚する。第二の生産過剰への演繹もまた、すでにかなりの程度に進展されてゐる。そこで吾々は論斷し得る、ミルはセイの影響を受けてはゐるが、併しそれは決して單なる再生産ではなくて、更に之を發展せしめたものであると。

然らば反對にミルの商業辯護論は、其後のセイに對して如何なる影響を與へたか？ このことを明らかにするためには、セイの第二版への發展を吟味せねばならぬ。彼れは初版の内容がナポレオン皇帝の政策と一致せず、且つ之を改更せしめんとする皇帝の希望を拒絶せる故を以つて、

14) J.-B. Say ; Traité 1^{er} édit., (1803), p. 153-154.

法制委員の顯職をすて、不遇の地位に陥つた。是等の事情のために第二版は政府の壓迫を受けて出版を許されず、ナポレオンの失脚した一八一四年に至つて初めて世に出たのであるが、この間の十餘年間、彼れは企業家として自ら紡績業を經營し、その經驗に思索を加へて舊版を改竄したから、それは殆んど全體にわたつて書き改められることゝなつた。而して此の間に現れたミルの商業辯護論が、果してセイの知る所となつたか否かにつき、吾々は積極的の典據を有しない。この點につきホランダ氏は、『*Journal*』の初版と第二版との間に經過した讀書と活動的な研究の十年間に於て、セイがスベンヌミルの論争、および「商業辯護論」の内容に就て知らなかつたといふが如きことは、全くあり得べからざることである』¹⁵⁾といふ。吾々もまた之を信する。セイは第二版を出した後まもなく、新政府の依頼を受けて、イギリスの産業状態を視察すべく再度の渡英をなしたのであるが、彼れは誰れよりも先づミルを訪問し、屢々彼れと會見し、またミルの提議と紹介によつてリカードウとも會見したのであつた。このことはミルとセイとの間にすでに早く交渉のあつたことを想はしむるものであるが、今もしセイが此の渡英によつて始めてミルを識り、従つて謂はゆる『ミルの説』に初めて接したものとすれば、その影響は當然にセイの第三版（一八一七年）に現はるべきであらう。然るに後に述べるが如く、版路説に就ては渡英の前後に殆んど重要な發展を見せてゐない。問題は寧ろ第二版に於ける彼れの發展にある様に思はれる。

さて版路説は第二版に於て略々完成されたと見ることが出来る。そこには物々交換説による論證のみならず、また收入分配論による論證も援用せられ、更に生産過剩論への演繹も當然に展開

15) Note on Malthus; Editor's Introduction, p. lxxxiii.

されてゐる。後の二點に關する彼れの言葉を左に引用する。

『過剰な生産物が販路を發見し得ず、その價值を低落せしめるのは、他の不足せる生産物の生産が害されてゐるからである。より通俗的に言ふならば、多くの人々が購買を減ずるのは、利得が減ずるからである。……此の利得はすべての國に於て、最大の商人から最小の工夫に至るまで、生産物の價值の中から得る所の部分によつて構成される。此の分配の據つて行はれる割合は、本書第二篇の問題を成す。』¹⁶⁾

『然らば人は言ふであらう、一般取引状態の良からざる時に特に感ぜられる所の産業の生産物を販賣するに當つての非常な困難は何處から來るか？……私はこゝではたゞ次のことを言ふに止める。一の生産物または多數の生産物の販路の缺乏は、一つ若くは若干の産業部門に於ける過剰の結果に外ならない。此の時にはこの部門に於ける生産物は、一般の欲望の要求するよりもより大なる分量に於て存在する。そしてこれは常に他の部門に於ける若干の生産物が、過剰となるどころか却つて缺乏してゐるからである……』¹⁸⁾

而して是等の點はすでにミルに於て明らかに展開された所である。それ故にセイの第二版は、ミルの影響によつて一段の發展をなし遂げたものであると考ふることは、理由なきことではなからう。

一九一四年十二月ミルの紹介によつて初めてセイと相識つたりカアドウは、セイを評して、『彼れはかれが極めて手ぎわよく書き上げた問題（經濟學）に就て、たやすく話し會ふべく準備されてはゐない様に見える』¹⁹⁾と言つてゐるのから見れば、彼等の會見が學問上に直接どれだけの影響を與へたかは疑問であるが、併しリカアドウは直ちに、『セイ氏は彼れの書の第一卷九九頁に於て、需要は生産によつて左右されるといふその同じ説を支持してゐる』²⁰⁾ことを發見した。この時

16) *Traité*, 2^e édit., (1814), p. 149.

17) *ibid.*, p. 149. 脚註.

18) *ibid.*, p. 148-149.

19) *Letters of Ricardo*, p. 52.

20) *ibid.*, p. 53-54.

以來、セイの説は強くリカアドウの注意をひくに至つた様である。リカアドウはこれまで、恐慌に關するマルサスとの論争に於て、常に『ミルの説』を援用して自説を裏書したのであつたが、『商業辯護論』に於ける簡単な要領に比較して、『綱要』に於ける此の説の詳細な展開は、リカアドウをして遂に、その唱道者をミルよりは寧ろセイに歸せしむるに至つた。²¹⁾即ち一八一七年の頃にはすでにリカアドウはセイの獨創性を信すること厚く、販路説をもつて『此の卓越した學者によつて、初めて解説された』²²⁾諸原理を包含すると裏書し、且つ暗黙の裡にセイの所説を採用するに至つた。²³⁾

第三版（一八一七年）に於ては、ミルおよびリカアドウの影響と認むべき何等の發展をも示してゐない。たゞ彼れが渡英の翌年、一八一五年はかの恐慌の勃發した年である。従つて一八一七年版に於ける發展の殆んど唯一の重要點は、この恐慌に對するセイの關心である。此の恐慌がイギリスの商品の輸出過剰となつて現れたことは、吾々のさきに見た所であるが、彼れは此の事實を新たに採用して、彼れの第三系論たる輸入増加は生産獎勵となることの説明とする。曰く、

『此の事實は本年（一八一六年）ブラジルに於て極めて明らかであつた。航海の自由解放がブラジルに向つて輸入せしめたヨーロッパ商品の大量は、この國の土地の生産物と商業にとつて極めて有利であつたから、ブラジルの生産物は、他の何れの時代に於けるよりもよりよく販賣された。そこで大なる輸入が一國にとつて利益をもたらすことが判る云々』²⁴⁾と。

然し乍ら事實は之に反して、當時外國に輸出されたイギリス商品は、殆んどその地に於て買ひ取らるゝことなく、此の輸出過剰が當時の恐慌の原因となつたことは、吾々のさきに見た所であ

21) Note on Malthus, Editor's Introduction, p. lxxxiv-lxxxv.

22) D. Ricardo; Principles, (Gonner's edit., p. 2.)

23) D. Ricardo; Principles, (ibid., p. 273-275.)

24) Traité, 3^e édit., p. 153-154.

る。たゞ併し吾々はこゝで、セイの第三版がミルその他の影響よりも、むしろ其の時代の事實から影響を受けつゝあることを注意すれば足りる。

一八一五年の恐慌以後イギリス、フランスの經濟界は一般に不況をつゞけ、一八一九年には再び恐慌に襲はれた。従つて此の間に準備され、且つ出版された二つの經濟原論（マルサス、シスモンチ）は、何れも一般的過剩を肯定する所の悲觀論であつた。然らばセイの樂觀論は、かゝる時代に於て、是等の反對論に對して、果してよくその主張を支持することが出来たかどうか？これ吾々が次に検討せんとする問題である。

五 販路説の修正

スマス及びフイジオクラートの所説を承けて、之を販路説として創めて唱へ出したセイの説は、ミルに傳つて一段の發展をなし、更にセイに反響して茲に一應の完成を見たのであるが、一方には一八一五年の恐慌につゞく經濟界の不況と、他方には是等の現實に照應する反對説に遭遇して、販路説は著しき修正をうけねばならなかつた。

第一の修正は、一八一九年の第四版に發見さるゝ。その直接の動機となつたものは、同じ年に出版されたシスモンチの『經濟學新原理』¹⁾である。シスモンチは最初はスマスの説を奉じ、一八〇三年に公にした『商業の富』²⁾に於ては、同年に出たセイの第一版と同じく、自由主義を奉じたものであつた。然るに一八一九年再度のイギリス旅行から歸つた彼は、深くイギリス當時の實狀に

1) S. de Sismondi; Nouveaux Principes d'Économie politique (1819).
 2) S. de Sismondi; De la Richesse commerciale, ou Principes d'Économie politique, appliqués a la Législation du Commerce (1803).

刺激されて、これまで信奉し來つた學説を放擲し、『新原理』による經濟學を發表するに至つた。セイの直接の刺激となつたものは即ちこの書である。セイは第四版（一八一九年）に長文の脚註を附け加へて言ふ。

『デウ、シスモンチ氏は、私が本章および本書第二篇初頭の三章で述べた諸原理をよく理解せざるものゝ如く、過剩に生産さ^れ得る一^の證據として、イギリスが工業生産物の莫大な分量をもつて、外國市場を横溢せしめつゝあることを引用する。（新原理第四篇第四章）だが此の過剩は、他の事柄を證するに過ぎない。即ちイギリス商品の過剩にある其の土地の生産の不十分なことこれである。若しもブラジルがそこにもたらされたイギリスの生産物を買ふに足るものを生産するならば、このイギリスの生産物は、そこで過剩とならぬであらう……』と。

これによつて吾々の認め得ることは、セイがシスモンチの指摘する事實——外國市場に於けるイギリス商品の過剩——を承認するに至つたことこれである。さきには販路説の第三體系論として、輸入されたる商品はそれだけ國內商品に販路を提供し、従つてその國の生産を盛んならしむることを主張し、その一證として當時のブラジルへの輸出過剩が、他の何れの時代に於けるよりもブラジルの好況に貢献したことを指摘したが、今や彼れは、ブラジル其他に於ける過剩輸出品が其地に於て販路を發見し得ず、即ちブラジルの商品を購買し得ず、従つてその生産を刺激し得ずして、徒らにそこに堆積されつゝある事實を認める。さきには輸入商品は生産を刺激すること主張し、後には生産おこらざる故に輸入は過剩すると説く。かくの如くして此の修正は、直接に輸出入に關するその系論に矛盾するのみならず、また生産物は生産されたる瞬間に於て、す

に他の商品に對して販路を提供するといふ根本命題にも矛盾する。蓋し一定の商品が生産と同時に直ちに販路を發見し得るならば、遠く外國市場にまで過剰に輸出さるゝの必要なく、事實に於ても當時國內市場の過剰をも伴つてゐたことは、吾々のさきに見たる所である。

第二の修正は、マルサスの『經濟原論』によつて刺激された一八二〇年のそれである。セイはその販路説がマルサスの『原論』によつて反對さるゝや、直ちに『マルサスへの公開狀』を發表して之に答へたのであるが、その所論はこゝでも著しい修正を受けねばならぬこととなつた。マルサスは、生産物は生産物によつて購買されるといふセイに反對して、生産物の大部分は寧ろ勞働に對して交換されることを主張する。謂ふ意味は、商品の大部分が社會人口の大多數を占むる生産的および不生産的勞働者によつて購買される事實を指摘したのであるが、これに對しセイは、最初に述べたる如く、勞働もまた生産物であると主張することによつて、僅かに抗辯し得たのであつた。併し乍ら名辭の如何に拘らず此のことは、生産物を購買するものは他の生産物であるといふ根本命題を修正して、それは各人の収入または所得であると言ひ換へたものであり、セイの論證は少くとも第一から第二の論據へ轉化したと言はねばならぬ。然るに此の修正によつて彼れの命題は三轉して、生産物を購買するものは生産であるとなると、生産を擴張すればするほど、ますます販路を廣むることゝなるから、マルサスの主張に對しては、之に近づくどころか却つて正面に衝突してくる。蓋しマルサスに於ては、販路を提供するものは消費であり、生産を擴張すればするほど、販賣はますます困難となるからである。セイに於ては生産を擴張すればするほど販路

はます〜容易となり、生産は何等の障害を被ることなく、擴張再生産は無限に進行を續け得る筈である。

然るに最後の最も重大な修正は、實にこの生産の無限の擴張に對する制限であつた。すでに一九二〇年のマルサスへの手紙に於ても、此の生産の制限は認められてゐるけれども、之を最も明瞭に認めてきたのは、一八二四年五月の『百科評論』(Revue encyclopédique)に現れたシスモンチの論文に對する答辯として、同じく七月の同誌に寄せた彼れの論文に於てあらう。この答辯に於てセイは言ふ、

「シスモンチ氏は言ふであらう、併し乍ら結局そこには生産の可能に對する一の極限がある、そしてたとひ人々の住居、衣服、教育ならび享樂に役立つ生産物は、無限に増加され且つ相互に交換され得るとしても、人々を扶養する生産物、従つて最も不可欠の生産物は、土地の廣さによつて制限される。若くは少くともそれを次第に遠方から得なければならぬ様になるに於て、人々はます〜高く支拂はねばならぬこととなる。此の時に至れば、生産によつて儲得し得る収入は、より高くなつた食料品を買ふには不十分となり、従つて新たな人口増加は不可能となつて來ると。私は之に同意する云々」と。

而してこの修正だけは、セイ自身も明かに之を自認し、自ら之を告白してゐる。彼れは一八二七年二月、マルサスから新刊の『經濟學に於ける諸定義』⁴⁾を贈られた返信にこのことを述べて、『貴下の他の著書および本書『諸定義』に於て攻撃されてゐる私の販路説は、結局何らかの制限を受くるものであることを告白しやうと思ふ。私は此のことを強く感ずるから、昨年の末に三巻として出版した『綱要』第五版(第一卷一九四頁以下)で、この制限を説明しておいた。尤もリカアド

- 4) Troisième Lettre à M. Malthus (Oeuvres diverses, p. 472-486.)
- 5) Sur la Balance des Consommations avec les Productions, (Oeuvres diverses, p. 256.)
- 6) T. R. Malthus; Definitions in Political Economy (1827).

ウ、ミル、マカロツク諸氏は、この點に關する私の説を採用し、イギリスの現内閣も、之を採つて其の新商業政策の基礎とすることゝなつたけれども、三段論法に執着せんよりも、事實と事實の關聯の探究に執着するの優れるを思ふからである』と。言ひ送つてゐる。

然らば第五版（二八二六年）に於て新たに附け加へられたと言ふ生産制限とは何か？それは前のシムモンデへの答辯（二八二四年）に於けるものよりも、より一般化するゝことゝなつた。前の場合に認められた生産の制限は、單に「人々を扶養する生産物、従つて最も不可缺の生産物」に過ぎず、『人々の住居・衣服・教育及び享樂に役立つ生産物は、無限に増加され且つ相互、交換され得る』ことを留保した所の、言は、部分的制限説に過ぎなかつたが、二年後の第五版では、『既に若干の生産物に就て觀察したことは、之を思考によつて順次にすべての生産物に推し及ぼすことが出来る』⁽⁷⁾との理由で、それは部分的制限から一般的制限にまで發展してゐる。即ち彼れに従へば、一般に生産に伴ふ技術的困難は、一定の程度を超える時は、急激に増加して生産費を高め、生産物の賣價をもつてしては之を償ふこと能はざるに至る。この生産費と生産物價格との限界が、即ちセイに於て生産擴張の極限をなすものであつて、この限界を超えた生産は、もはや之に伴ふ生産物需要を比例的に増加せしめず、生産は販賣の方面から行詰りを招來すると共に、販路説もこの一角から崩壊せざるを得ない。これセイ自ら告白して、『私の販路説は、結局何らかの制限を受けるものである』といふ所以である。左に第五版に於ける彼れの附説の要點を引用する。

『増加しゆく生産の極限は、如何であらうか、また日々に増加する生産物は、何處で一方が他方と絶えず交換されるであら

7) Lettre à M. Malthus, 24 février 1827 (Oeuvres diverses, p. 504-505.)

8) Sur la Balance (Oeuvres diverses, p. 256.)

9) Sur la Balance (ibid., p. 256.)

10) Traité, 5^e édit., (1826), p. 185.

うかといふことは、恐らく人々の知らんと欲する所であらう。何となれば無限の進歩のあるのは、抽象的分量に限られ、實際に於ては、事物の性質上すべての極端は制限されてゐるからである。然るに吾々がこゝに研究するのは、實際的な經濟學である。

『生産に伴ふ困難は、一般に生産的勞務によつて克服されるが、それが一定の程度を超える時は、より急速な比例を以つて増大し、生産物の利用から生ずる満足の程度を躊躇なく超過するに至る。この時でも、なるほど有用な物を作り出すこととはできるけれども、併しその效用はそれに費さるゝ所に値せず、従つてそれは少くともその價值が生産費に等しいといふ生産物の本質的條件を充さないこととなる。……若しも人間三十日の勞働が、之を二十日間養ふに過ぎないとすれば、かゝる生産に従事することは不可能であらう。かゝる生産は、新たな個人の發展を助長することとなるべく、その結果として、新たな衣服・住居・その他の需要を作り出さないであらう』¹¹⁾

かくの如くして生産の制限に關する販路説の修正は、先づ第一にマルサスへの手紙（一八二〇年）に現はれ、第二にシスモンデへの答辯（一八二四年）に於て明瞭となり、第三に『綱要』第五版（一八二六年、生前最終版）に於て一般化されたが、最後にセイの最後の著述たる『講義』（Cours complet d'Économie politique pratique 1828-9）に於て、この問題は更に一層の展開を示すこととなつた。

『講義』の第三篇第二章に於て、セイは先づ其の販路説を展開した後、その結語として言ふ、『産業の擴張するに従ひ、資本の蓄積するに従ひ、人口はますます増加し、且つますますよく扶養されて、遂に一定の階段に達する。吾々は次に此の階段を指摘しようど努めるであらう』¹²⁾と。かくて次章の第三章は専ら『生産の制限に就て』、特別の研究をなすために献げらるゝこととなつた。彼れはその劈頭に言ふ、

11) Traité, 5^e édit., (1826), p. 194-196.

12) Cours complet d'Économie politique pratique (1852), Tome I. p. 345.

『前章(販路説)から来る必然の結果は、一國の産業と資本とから生じ得る生産には、何等の指示せらるべき制限も存しない球に見え、事實に於て、若しもすべての生産物に就て、一方が他方を購買し得るならば……生産物の分量の如何に拘らず、そのすべてが購買者を發見し得ることは可能である、と結論することが出来る様に思はれる。そこで此の點に關して重大なる論争を惹き起したのであつた。

『想ふに何れの側の論者も、生産物といふ言葉に就て、その價值を十分に考慮しなかつた様である。生産物なるものは、絶對的に言つて、單に人間の欲望を充たし得る一の物であるのみならず、效用が費用に値する物である』と。

そこで費用と效用とを貨幣に換算して比較し、費用が效用を超過する場合には、そのもの、生産または購買は中止さるゝに至る。従つてこの程度を超えた生産は、それによつて何等の販路を提供するものではないと言ふ。

「吾々はあらゆる物に對して出来るだけ少く支拂はんとする。然るに其の物の本源的價格即ち生産費が、そのもの、消費より生じ得る満足を超過する瞬間には、之に對して何物をも支拂はないものである。

『このことから見て明らかなことは、一般に生産物が次第に増加して、その一方が他方を購買し得るのは、或る極限まであり、この極限を越える時は、一定の生産物は餘りに高價となつて、その中に含まるゝ效用を以つては、之が消費者に對して、その獲得に要する犠牲を償ふこと能はざるに至る。此の時以後、それはもはや生産物ではなくなり、販賣されざるに至り、その結果として、そのもの、販賣によつて新たな生産物に販路を提供し得ざるに至る』。

以上セイの販路説に於ける修正は、然らば何故に修正の餘儀なきに至つたか？ 此點につき彼れは明瞭に言ふ、『三段論法に執着せんよりも、事實と事實の關聯の探究に執着するの優れるを思ふから』と。たゞ彼れが事實と事實の關聯を顧みるためには、主としてマルサスおよびシスモ

13) Cours, *ibid.*, p. 345.14) Cours, *ibid.*, p. 346-347.

ンデの刺激に待たねばならなかつたが、何れにせよ、抽象的思辨から具體的實證に向つて、一步步と進んで來たことは事實である。さうして彼れが「空想的經濟學を打ち建てつゝあるその基礎の抽象と活潑に闘争した」¹⁵⁾のは、最後の第五版に於てあり、更に最後の著述は「實踐的經濟學講義」となつたのであるが、彼れが抽象から具體に進むに従つて、販路説の修正はますます進展し、生産制限説はいよゝゝ詳細に展開されねばならなかつた。吾々はこゝで何物かを學び得る様である。

六 販路説の批判

當時のイギリスに於ては産業革命は一應の完成をとげて、生産力の異常な發展を見た結果、生産は著しく擴張し得る可能性を與へられてゐた。これが戦争の勃發、進展、終焉を動機として生産過剰をひき起し、その結果として恐慌を頻發せしめ、生産の沈滞と販賣の停滞は相次いで繰返されたから、これらの現象を説明し、その原因を探り、その對策を講ずることは、當時の學者に課せられた意識的または無意識的の課題の一つであつた。セイの販路説も亦、客觀的にはこの課題に對する解答と見ることが出来る。

いま此の見地から彼れの説を吟味する時は、販路説は彼れの大きな自負にも拘らず、期待さるべき成功を收め得たとは言ひがたい。第一にそれは當時の現實の説明としてさへ十分ではなかつた。蓋し吾々のすでに見たる如く、當時の過剰又は沈滞は、すでに可なりの程度に一般化された

ものであつたから。況んや其後に於ける資本主義の發展は、此の現象をます／＼一般化こそすれ、彼れに有利な方向へは一步も進んでゐない様に思はれる。過剰や沈滞や、更に一般的には景氣の變動が、今日の經濟界に於ける一般的な現象であることは、殆んど何人も疑ひ得ないであらう。いふまでもなく何れの場合にも例外的事例のあることは免れないけれども、この例外的故に恐慌または景氣の一般性を否定することは出来ないであらう。

第二に、従つてまた恐慌対策としての自由放任論も妥當なものではあり得なかつた。何となれば、其後の資本主義の發展は、姑く大體に於て彼れの主張を忠實に遵奉して、放任經濟が是認され實施されたのであるから、過剰や沈滞は彼れの所論に従つて次第に減退さるべき筈であつた。然るに事實は却つて反對に進展して、十九世紀の後半には、彼れとは全く反對に、放任經濟を以つてその原因とするものさへ出た程であるから、此の點に關する彼れの見解も亦、事實によつて反證された形となつた。

然らば何故に、彼れの所論はかやうな結果に終らざるを得なかつたか？ 吾々はこゝで彼れの内在的批判を必要とする。

先づ第一に彼れの課題は、その歴史的意義の故に、率直なる事實の認識に出發せねばならなかつた。それにも拘らず彼れは先づ「三段論法に執着」して、現實を顧みない思辨から出發した。かくて思辨によつて成立した販路説は、實證論者の反對に刺激されて、「事實と事實の關聯の探究に執着する」様になると、多くの修正を施して最初の所論を歪曲せねばならなかつた。

第二に現實を離れた思辨の陥り勝ちな抽象方法は、セイに於てもまた之を免れ得なかつた。彼れは先づ賣買關係に於ける貨幣を捨象して、之を物々交換として見た。然し乍ら此の種の抽象論の教ふる所は、たゞ物々交換時代に於ける生産過剰の不可能を證するに過ぎない。それは今日の現實社會とは何のゆかりもないものである。此の點に就て吾々は既にリカアドウの批評をなすに當つて之を詳細したから、こゝにはこれ以上に論ずる必要を見ない。たゞ併し、物々交換説から販路説を演繹して、一般的過剰を否定することは、それ自身に見逃すべからざる矛盾を包藏する様に見える。何となれば、生産物は生産物を以つて購買されるのであるから、それは常に販路を發見するであらうといふ場合、前提はすでに結論を含んでゐる。蓋し生産物は生産物を以つて購買されるといふ命題は、セイ自身も當然に認むる如く、生産物を買りに貨幣を得、得たる貨幣を以つて生産物を購買することを意味する。然らば此の命題はすでに、生産物の貨幣への轉化を前提し、販賣の可能を前提し、販路の存在を前提する。然るに吾々の證明せんとすることは、販賣の可能、販路の存在ではなかつたか？ 販路の存在を證明せんとして販路の存在を前提し、販賣は存在するから販路は存在するとは、抑も何ごとを論證するのであらう？

併し乍らセイは反對論者の反駁に刺激されて、無意識的に、従つて不明確にはあるが、物々交換説から收入分配論へ移轉しつゝあつた。然るに收入または所得を以つて購買力資源となすならば、それはすでに論敵マルサスおよびシスモンデの主張と大同小異である。マルサスに於ては、資本金収入の一部が資本に追加されて生産擴張をなす場合、増加したる生産物と、資本金階

級の消費減退とが、如何にして均衡を保ち得るかを問題とし、シスモンデに於ては、それと勞働者階級の消費減退とが、均衡を保ち得るかどうかを問題としたのであつた。然るにセイに於ては収入は更に収入の根源たる生産にまで還元されて、生産を以つて販路を提供する根源となすに至つた。

すでに生産そのものが販路を提供するとすれば、之を抽象的に考ふれば、生産は無限に擴張され、再生産は永久に進展し得る筈である。蓋し生産そのものが需要を作り出し販路を提供するのであるから、生産はこの方面に全く無涯の天地を有することとなる。彼れの生産無制限説はこゝから展開されたのであるが、既に吾々の見たる如く、それは『修正』によつて放棄せられ、生産制限が之に代ることゝなつた。けれどもセイの生産制限は、マルサスおよびシスモンデのそれが消費減退に伴ふ販賣の行詰りに歸せらるゝに反し、一應は生産そのものゝ中に求められる。生産費の遞増これである。だが生産費の遞増が賣價を償はざるに至るといふ彼れの主張も、生産費に於て購買し得る需要の遞減を主張するマルサス、シスモンデも、要するに同じ事實の兩面を言ふに過ぎない。たゞ彼等の間に超ゆべからざる限界として残るのは、この生産の制限または極限が、セイに於ては遠き未來に於て一回限りに到達せらるべき境地であるに反し、後者に於てはそれは、現實の社會に於て繰返し發現し來る現象とされる點にある。

最後に、貨幣を捨象した販路説はまた信用をも捨象する。資本信用の發達した今日の社會に於

ては、企業家の需要もしくは販路を創造するものは、主として固定資本および流動資本に關する信用であるから、資本信用を度外した販路説は、たとひそれが如何なる結論に到達しやうとも、直接には現實の社會に就て何ごとをも言ふものでない。今日の社會に於て、生産の増加は購買力を増加するとしても、逆に購買力の増加は必ずしも生産の増加によるものではない。もとより吾々の思惟の過程に於て、貨幣を捨象し信用を捨象することはやむを得ないとしても、たゞこれだけの思辨を以つて現實の社會を説明し、實際の現象を説明せんとするならば、それは至難でなければならぬ。今もしセイの販路説が期待さるゝ成功をかり得なかつたとすれば、その責任は彼れの抽象的思辨に歸せらるゝよりも、むしろこの抽象的思辨を以つて現實の社會に臨んだ彼れの態度に歸せらるべきものであらう。(完)